

③「水害は一時、川は永遠」あゆが育む価値は無限大

スクリーンには、水害を乗り越え立ち上がる人々の写真が次々と映し出されました。川沿いで「1軒も辞めずに蘇った」人吉の旅館の女将たちの奮闘、ラフティングボートが屋根の親子を救出したエピソードが紹介されます。「これこそが共同体の力、流域治水の一番大切な『人と人の助け合い』です。住民の皆さんは川を恨まない。水害は一時、川は永遠なのです。失われる環境価値は無限大。たった数百億円の目先の利益やハード思考で、この永遠の価値を売ってしまっていないのでしょうか」

④行政と住民の間に広がる「決定的なズレ」

なぜ国はダムに固執するのか。「霞が関にいと水害＝ダム建設の思考から抜け出せない。そこには強固な利権構造が見え隠れします」と国政の現状を告発。さらに、行政が示す「清流の基準」と住民が感じる「美しい川」には、透視度で150cm以上ものズレがあることを暴露しました。

⑤ 諦めずに声を上げ、次世代へ「本物の流域治水」を

嘉田さんは滋賀県知事時代、全国初の「流域治水条例」を制定し、3つの県営ダムを中止させた実績を持ちます。「一度コンクリートに変えた予算や破壊された環境は二度と元に戻りません。国が決めたから、知事が進めるから、と諦めればツケを払うのは子どもたちの世代です」

自然の仕組みを活かし、
住民が主体となる
「本物の流域治水」を、
いまこそ私たちの手で
つくり上げよう。



社民党熊本県連合代表

今泉克己